

台湾現地レポート②

危険を知るからこそ、身を守れる

—— 台湾の草の根に息づく「自分の命は自分で守る」という覚悟

執筆：岩本 由起子（国防安全研究院） 報告日：2026年2月1日

2026年2月1日、私は新北市の五股にある「全民国防教育中心」を訪れました。教室には、老若男女問わず、高い意識を持って自発的に集まつた約15名の市民が、真剣な面持ちで講習に耳を傾けていました。特筆すべきは、台湾国内メディアだけでなく、日本やドイツからも取材陣が詰めかけていたことです。台湾で今、こうした「自ら備える市民の動き」がいかなる熱量を持って広がっているのか、今や世界がその動向を注視しています。

「自分の命を守る基準」を知るためのリアリズム

会場の壁一面に並んだライフルは、すべてエアガン（BBガン）ですが、一見して判別がつかないほどの精巧さと重量感を備えています。参加者が求めていたのは、高尚な防衛論ではなく、「万が一の時、どうすれば自分や家族の命を守れるのか」という具体的かつ切実な判断基準でした。

「安全を教えるのではなく、何が危険なのかを教える」

この方針のもと、実銃に近い操作性を持つエアガンを教材に用いることで、銃器のメカニズムや潜むリスク、そして扱う際の重い責任を身体感覚として叩き込んでいました。「何が危ないのか」という本質を正しく認識することこそが、パニックを防ぎ、生き残るために唯一の基準となるのです。

凝縮された「生きるための知恵」

講習は射撃訓練に留まりません。そこには平時の防災と有事の混乱を生き抜くための「知恵」が凝縮されていました。

- **避難キットの「動的」運用：**備蓄を単に「持つ」のではなく、実際に中身を取り出し、劣化を確認し、自分の身体で運べるかを確かめる訓練。

- **法的リテラシーと自己防衛**: 混乱時でも「即時性」と「比例性」を失わない。正当防衛の限界を知り、法的なリスクからも身を守る知恵。
- **精神的レジリエンス**: インフラ破壊や情報操作(デマ)に惑わされず、いかに冷静な判断基準を保ち続けるか。

「自助」の意識が変える社会の強靭さ

講師の言葉で最も胸を突いたのは、「平和は受け身では得られない」という一言です。

もちろん、すべての市民がこうした訓練に参加しているわけではありません。しかし、まずは自分の命を守ろうとするこうした「自助」の意識を持つ人々が、社会の中に確かな層として現れ始めていることは事実です。自律した市民が地域に存在すること自体が、結果として社会全体の強靭さ(レジリエンス)を底上げしていく。そのプロセスを目の当たりにした気がしました。

結びに代えて

2026年、東アジアの地政学的リスクはかつてない高まりを見せています。法律を学び、野戦食(MRE)を試食し、自らの手を動かして「生存の確率」を高めようとする人々の姿は、私たち日本人に、「自分の命を守る責任の所在」について、改めて向き合う機会を静かに与えてくれています。

国防とは、決して遠い誰かの仕事ではなく、こうした「自分の命は自分で守る」という個人の覚悟の集積なのかもしれません。

